

# 中国再訪 (2)

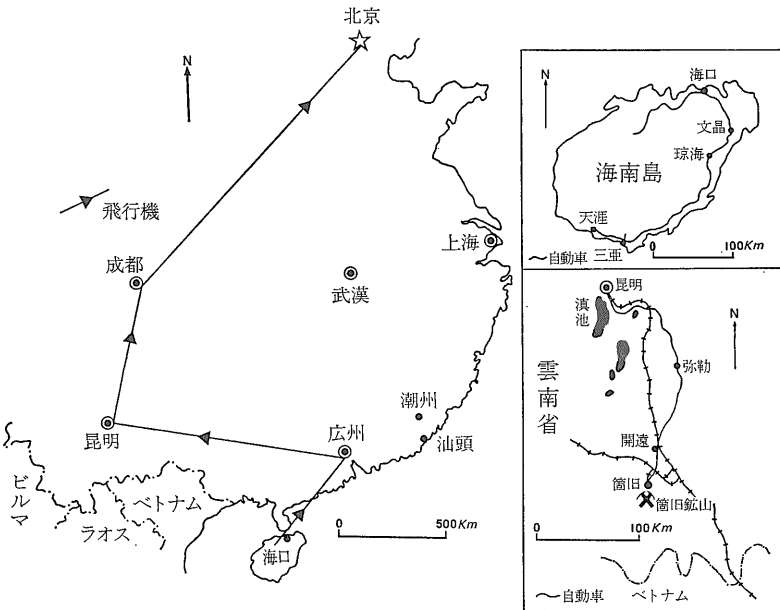
小 村 幸二郎 (鉱床部)

## 鹿回帰頭の里

蘇東坡の悲嘆にくれる姿がとても想像できないほどに美しい天涯を出発してから丁度30分走って 三亜市の中心に到着した。ここは海南島南部最大の市街地でありまた その風光の素晴らしさが海南島第一と目されている所である。牙をむく大海原と深い入江の静かな水面 ゆるやかにうねる緑の山 そしてあくまでも青い空 自然美に恵まれたこの町は 観光開発に積極的に取りくもうとしていると噂で聞いたが 確かにその美しさの中に居ると そのような事業が行われるだろうと思えてくる。亜熱帯圏や熱帯圏特有のけだるさのようなものが感じられないことはないが その中で この島の人達は やはり 唯一筋に建設への道を精力的に歩いているのだろうか。道路の両側にはいろいろの店が軒を連ねている。そして 一般に 石碌鉱山のある昌江の店にくらべると 大きいようであるが 店の大きさや造りは様々である。恐らく 長い年月にわたって 少しずつ発展していったのではなかろうか。しかし 噂通りに本格的な観光開発が進んで交通の便が飛躍的によくな

り 近代的なホテルなどが数多く建つようになると これらの商店も恐らく姿を変えることだろう。近代化は大きな目標には違いないだろうが そのために 古い伝統に育まれてきたものが全く消え去るとしたら やはり 一抹の淋しさは拭いきれないように思える。

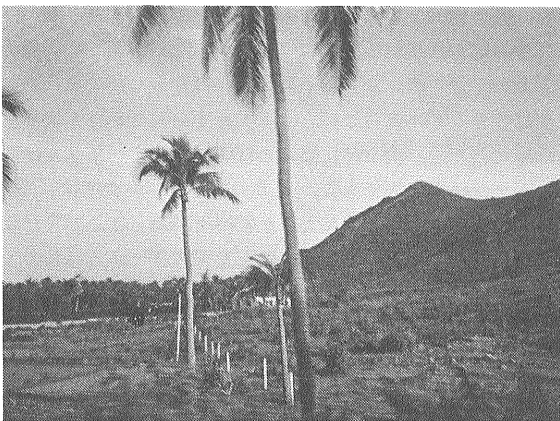
マイクロバスは 市街地を通り抜けて間もなく 左へ曲って ゆるやかにうねる山を目指した。山腹の曲りくねった道を走るのには 運転する人にとっては面倒なのだろうが ゆったりと乗っている者にとっては 道路が曲がる度に風景が変わるので 結構楽しい。突然 前方のスピーカーから Yという女性歌手の しゃがれ声の演歌のメロディーが流れてきた。40才を過ぎているらしい運転手の好みらしく 運転席の横のポケットには日本の演歌のテープばかりが10本以上も入っていた。天の涯まで来てまさか日本の演歌を聞こうとは夢にも思わなかった。もしも大昔にこのようなテープがあったとしたら 慟哭の日を重ねていた蘇東坡は 果して どのようなメロディに耳を傾けていただろうか。山の頂上から中腹にかけて広がる椰子園については 三亜市街から左へ曲って20分後だった。



美事に育った椰子の林の中に 点々と 宿泊所が建っている。どの建物も40坪前後はありそうな立派なもので われわれにあてがわれた家は 3LDK で 風呂やトイレはもちろん クーラーやテレビまで備えてあった。ゆるやかにうねる山の斜面に広がる広大な椰子の林 その中に点在する立派な宿泊所 1人当り 10m<sup>2</sup> の社宅に住む人はまだしも 部屋の確保がままならず結婚さえものぼしているという人からみれば将に別天地のような所だが ここにも悩みがないわけではない。

この土地は生産大隊によって開拓され 椰子園になったらしい。その後 招待所を建設することになり 招待所が生産大隊からこの土地を購入して 現在のような立派な態の場にしたとのことだが 全く捨てるところのない椰子の所有権については 招待所と生産大隊との間で 活発に議論されたらしい。そして 最終的には土地の所有権は招待所 椰子の所有権は生産大隊に それぞれ属するというので この問題は着落したという噂である。この話は人からのまた聞きなので 本当なのかそうでないのかはよく分からない。もし 本当だとすればなかなか厄介なこともありうると思われるが 両者の間は 一体どのように調整されているのだろうか。

まことにおだやかな姿態をもつ山と そこから見る浜辺の美しさに時のたつのを忘れるうちに ふと この自然美にまつわる昔話のようなものがあるのではなかろうか と思った。そして 天津生れの天津育ちの閻さんにとずねても分らないだろうとは思いつつも この場所まつわる物語のようなものはないだろうか とたずねてみた。残念ながら 閻さんは やはり 知らなかった。



三亜市の招待所付近の風景。中央の家は管理事務所、その左の椰子園の中に招待所が点在している。

鹿回頭の物語はここで生れた。

宿舎から歩いて5分ばかりの所にある食堂は意外に広い。二組の先客がどうい物食っているのかはよく分からないが ちらっと横目で見た皿の上には 間違いなくエビがのっている。海に近い所だけに 新鮮な魚を食べられると 食いしんぼうの腹は やけにわめいているが まだ午後6時である。ビールをグラスに半分ばかり飲んだところに料理が運ばれてきた。大きな皿の上には 期待に違わず 伊勢エビ イカ ヒラメ 肉 野菜などのイタメものや 焼飯 白飯などが山盛りになっている。美味い美味いと連発しながら 休む間もなく箸を進めた。食事ははじまって丁度1時間 テーブルの上には 一かけらの食物も残っていなかった。寝るにはまだ早い。だからといって町まで行くのも気が進まないし 椰子園の中を散歩するしなかさそうである。美味しい物を腹一杯食べた後は 何となくじっとしていたいものだが 食堂から出た とたんに「海岸へ行きましょう」と誘いがかかった。天涯の美しい浜を見てきたばかりだから今更行かなくてもと思いながらも 皆さんの御好意に甘えることにした。

島の南側に位置しているこの場所では たとえ落陽がどんなに美しかろうと見ることはできない。切角だから 腹ごなしに波にたわむれてくるかと 車に乗った。車は 曲りくねった道をゆっくりと下ってゆく。ここへ来た時に通った道だから 三亜市街の方の海岸へゆくのだろうと思っていたが 車は途中から右の方へ向って走りだした。そして目指す海岸に到着した。夜店らしい小さな店が数軒並んでいるそこには やたらと人が多く セーラー服の水兵も多い。浜へおりる角に建っている大きな建物は 海軍関係のものらしい。海岸へ出てみて 一瞬自分の目を疑いたくなるような思いにかられた。そこには糠のように細かな白砂の浜が 弓なりに 2km 以上も続いていた。浜に 打寄せる大きな波 浜に迫る山 ここにも天涯の浜と同じように素晴らしい天然の美がある。閻さんと林さんは 足元をくすぐる波に たわむれながらも せっせと貝殻を拾っている。一人は恋人に 一人は夫と子供への土産に 貝殻を拾っているのであろう。青白い夕暮れの空に浮ぶ 2人の黒い姿が とても美しく見えた。浜に遊ぶ人達の姿は ゆっくりと闇に消えてゆく。打寄せる波と椰子の葉ずれのささやきが 一しお南国情緒をかきたてる。闇に 閉ざされるまでこのまま居たいと 念じているのに 「帰りましょう」と声がかかった。食堂を出てすぐに誘われた時には 何となく気が進まなかったのに いざ帰るとなると まだしばらくの間居たいと願う自分のわがままさにはいささかあきれるが これほど美しい砂浜があるとは全く想像もしなかったのだから仕方がない。

陽が高いうちにこの砂浜に誘ってもらえていたら素晴らしい写真も撮れただろうし、もしかしたら泳いでいたかもしれないだけに残念ではあるが、そのように手配してくれなかった人をうらめしく思う前に、観光開発の中心になるだろうといわれていた三亜市にこのように美しい浜があることを知らなかった自分の努力の足りなさを反省すべきであろう。

潮風になぶられ、少し砂浜を歩いたせいかな、満腹感は既になくなっていて、暗い道の急カーブを通るたびに町の灯りが美しく見える。昼間も日没後も美しい所だが、その美しさに接することは二度とあるまい。

椰子園の中は静まりかえっていた。それほど遅い時刻ではないので、一杯飲んで唄でも歌っている人達が居てもよさそうなものだが、数10人が泊まっていそうな大きな宿舎でさえ、電燈は点っているのに静かである。宿舎に帰って2時間ばかりたった頃、玄関のドアをノックする者がいる。二重になっているドアを開けると、バナナとジュースを持った閩さんと林さんが立っている。夕食が少し早かったので、差入れに来てくれたらしい。部屋に入って来た2人が椅子に腰をおろしてすぐ、閩さんは「この土地にまつわる愛情物語があるそうです」と話しはじめた。ここに着いて間もなくした突拍子もない質問を気にして、この土地のことをよく知っている人を探し出して、聞いてくれたらいい。もちろん閩さんは海南島語を全く知らないのだから、林さんと一緒に聞いたにちがいない。

閩さんの話では、その物語りには「鹿回帰頭」という題がついているということである。昔、若い猟師が獲物を求めて全く道のないこの山中に入ったことがあった。その若者は、密生する灌木を押し分けながら朝早くから夕方まで歩き回ったが、獲物を見ることもなく、重い足どりで帰路に着こうとしていた。灌木がま

ばらに生えている場所に出て一息ついた時、前方に鹿が見えた。その若者は、それまでの疲れも忘れて、その鹿を追っていった。北の方へ逃げれば次第に山が深くなるだけに逃げきれたのだろうが、どうしたのか、その鹿は南の方へ逃げた。藪の中を跳びながら懸命に逃げていたその鹿は、遂に海辺へ出て最後の時を迎えようとした。若者は、ようやく暮れようとする頃になって、一日の労苦がむくわれる喜びに、行手をはばまれて立往生した鹿を射ちとめようとした。その瞬間、恐怖におののいていたその鹿は、絶世の美女に化身した。若者は、余りにも美しい鹿の化身を見て、獲物を持って帰るのを待っている人達のこと、それが鹿の化身であることも忘れ、その後、この山の中で、その鹿の化身と共に生涯を終えたという。

閩さんの話が終ったとたんに、「お二人は鹿の化身じゃないのかな、そうだとすると、ここに居る日本人の中の2人は日本へ帰れなくなる」と言うと、2人は大声で笑いこけた。静かでおだやかな山の夜に聞いたロマンチックな話、この旅でも、また一つ新しい収穫があった。

仲の良い2頭の鹿の化身は、それぞれ、スカートとズボンに身を包んで、静かに帰って行った。遠い昔、野生動物は、この山中を思う存分跳び回っていたことだろうし、また、人口もきわめて少なかったその頃は、これらの動物を仕止めることで生活していた人達が、多勢居ただろう。その当時とくらべると人も増え、音と光と電波がとび交う現在は、野生動物の種類や数はどのように変っているのだろうか。

## 広州へ

若い猟師と鹿の化身との愛情物語をじっくりと聞いて、中々寝つけなかったにしては早く、5時半に目が覚めた。全く静かで、椰子の葉ずれの音も、鳥や虫たちの啼き声も耳に入らない。ドアをそーっとあけて散歩に出てみた。胸一杯に吸いこむ空気は甘く、都会では味わえないうまさである。5分ばかり歩いた所に、100名ぐらいは泊れそうな大きな招待所があった。まだ朝早いというのに、泊り客はほとんど起きているらしく、洗濯物を干している人さえいる。ゆっくりと園内を歩いているうちに、次第に人影が目につくようになってきた。静まりかえった自然の中では、動物たちが跳びはねたり大きな声を出してもほとんど気に障らないものだが、人が大声で騒いだり不要になった物を意識的に放置したりするのを見ると、腹立たしくなってくることがあるが、この国の人たちは、そうしたことを幼い頃から身に



招待所付近から見た三亜市の風景。海南島第一のレジャー基地になろうとしている美しい所である。

つけているのか この大きな招待所の内部も周囲も実に静かである。

7時にはじまった朝食のメニューはコーヒー 甘いパン 揚げパン 肉マンとお粥だった。毎朝そうだが ゆっくりと朝食をとる時間はない。今朝も食事をはじめて45分後には出発することになった。緑と水に抱かれた三亜市の家並を見下ろして間もなく 車は海口市へ向う道路へ出た。ゆるくうねる舗装道路には延々と連なる巨木が影を落してはいるものの その隙間から洩れる光は まだ朝早いというのにかなり強烈である。地形がほぼ平坦な上に道の両側にはきれめなく並木が続いているので 車窓越しに見える風景はほとんど変化しない。2時間ばかり走ってゴム園で小休止することになった。ゴム園に到着する少し前に 曲りくねった登り坂があったが 後部座席に居た1人は どうやら この坂道でゆられたために酔ったらしい。出発前に積みこまれた紙パック入りのオレンジジュースはすっかり温まっていたが 同行の人達は うまそうに飲んでいた。生温かいジュースは 酔った人の口にはとても入らないらしい。15分ばかりの休息ではあったが酔った人には貴重な時間だったらしく 出発する頃には顔色も元に戻っていた。

西部地域を占める山岳地帯が 急速に遠ざかってゆく。この山岳地帯には 石碌鉱山の鉄鉱床 銅鉱床 コバルト鉱床をはじめ 金 銀 銅 すず タングステンなどの鉱徴地が発見されているということだが 石碌鉱山の鉱区内を除いては 調査はあまり行われていないらしく それらの性状や地質状況などに関する論文や報告書はほとんど見当たらないが いずれ これらのタイプや経済性などについては調査が行われるのであろう。

変りばえのしない風景が相変わらず続くので 酔っている人は気分転換ができなくて辛いだろうと思っているうちに 急に賑やかな町に入った。正午近くとあって 道路傍の露店は大変な賑わいをみせている。興隆というこの町は 特に大きくはないようだが 何故こんなに賑やかなのだろう。倉庫のように見える大きな家の軒先に 日本の田園地帯でもしばしば見かけるような小型の農機がずらりと並んでいる。これまでに通ってきた道路からは確かに農耕地が見えはしたが 大規模の農耕地は見当らなかった。こんなに多くのモーター付の農機が売れるのだろうか と いささか気になったが それは実情を知らぬ他国者の要らぬ心配であった。整然と並んでいたこれらの農機は 次から次に若者の手で動き出した。正午近くになってから畠や水田へ行くのだろうか と いささか怠慢だと思いつつながら見ていると それぞれの車には荷物が積みこまれている。その光景を見

1986年3月号

ているうちに 若者に対する批判めいた気持をほんの一瞬ではあったが抱いた自分の修行の足りなさを強く思いしらされた。こじんまりとしたエンジン付きのこれらの農機は この町では荷物運搬用として利用されていたのである。

雑踏の中を徐行していた車は右へ大きく曲り 石造りの橋を渡って曲りくねった坂道を上りはじめた。朝食後すぐに出発したこともあって酔ったにちがいない人にとっては どこまで続くか分らないこの曲りくねった坂道は またまた苦痛の種になるのではないかと気をもみはじめたが その坂道は案外短かく 5分とたたないうちに平坦な道に変わった。そして間もなく午前中の目的地である温泉場に到着した。

広々としたゴム園の中にあるこの温泉は 海南島では数少ない温泉の一つで 50°C ぐらいの湯が出ているということだが どうしたことか この日は湯が出ていなかった。湯を引くパイプもはずれ シャワー室も乾ききっていたが やはり観光地の一つなのだろう。賑やかな声にふり返ると 数10名の団体客がやってくるころだった。色とりどりの服装をしたその団体客は どうやら中学生らしい。近づいて来た子供達を見て 先ず第一に顔だちが少し違うことに気がついた。通訳の閩さんにたずねてみると この付近の住民の多くはインドネシア系だということであった。恐らく ゴム栽培のために移住してきた人達なのだろう。

緑のゴム園に囲まれた静かな池 色とりどりの花が咲き匂うここは公園のようなたたずまいである。昼食直前の時間を割いて少し歩いてみた。5分ばかり歩いた所に瀟洒な建物があった。強い陽射しに光る緑の中に建っているその家は白壁に紅瓦で 東南アジアの高級住宅街で見かける家に似ている。個人住宅ではないに違いないが 一体どういう家なのだろう。妙に興味をそそられ それとなく同行の人に聞いてみた。そして 東南アジアのある国の偉い人がここを訪れた頃に建てられたらしいことが判った。この家から少し離れた所には観音竹が密生し 菠羅密(ポロミ)になっていた。外観はかなりグロテスクだが この菠羅密は果実で 大きな種は真黄色の甘い実に包まれている。外観は全く異なっているが 味と口に入れた時の感触はドリアンに似ているようである。石碌鉱山で御馳走になった時には もう少し見てくれのよい果実と想像していたが 外面と中味とが必ずしも一致しないのは人間ばかりではないらしい。

昼食の仕度ができた。結構広い食堂のテーブルには 兎のスープ チキンカレー 蟹 豚肉と野菜のイタメもの 白飯などが並んでいる。いつものことながら食事

はポリウム満点である。ただ 日頃生野菜のサラダを食べなれている人にとっては 少々物足りないかもしれない。それは 一般に生野菜を食べる習慣がないのだから この国に滞在している間は 当分の間 我慢するしかない。

少々早目の昼食だったが 食後に少し休むという習慣がないのか 食べ終るとすぐに出発するのが常である。日中の暑い中を食後すぐに出発すると聞いて 酔う人が出なければいいかと少々気になった。道路は殆んど平坦である。兎のスープが腹の中に収まったからでもなからうが マイクロバスは今朝よりも一段とスピードを上げて走ってゆく。温泉から30km ばかり東方の万寧の近くにある東山嶺は奇岩の山として知られているが その岩山を見ることもなく 車は万寧の町を一気に走り抜けた。腹がくちくちになった上に車の振動が良い具合に睡気を誘うのか ついさっきまでクラシック音楽を口ずさんでいたK先生は ぐっすりと眠っている。南国の日中を走る車の中は クーラーを全開しているので涼しいはずだが 涼しいという感じではない。時々窓をあけて風を入れた方がむしろ涼しいようである。いつの間にか強い陽射しが消え去っていた。どこまでも青々としていた空が灰色の雲におおわれている。近くに温泉がある琼海を過ぎる頃 ものすごいスクールがやってきた。雨の中を走るというよりは 水の柱をへし折りながら走っているようである。それでも 時折傘もささずにゆうゆうと歩いている人がいる。いくら馴れているとはいえ 脳天が痛いのではないかと人ごとながら気になった。しかし こうしたスクールはしょっちゅうあるのだから 取越苦労というものかもしれない。行き交う自動車も多くないし 道路も中々上等なので こうした雨の中でも 殆んど事故がないのだから 日本の都会の近郊でこのような雨にあったら 一体どのような状況になるだろうか。雨の中では一休みというわけにもいかず 走りつづけるうちに小降りにはなってきたが 西の方は完全にスクールに包まれている。ぼつんぼつんと道路傍に見え隠れしていた家が 北へ進むにつれて次第に多くなり 出発してからおよそ3時間後に 見覚えのある空港が視界に入った。三亜市の招待所を出発してから7時間半 目的地の海口市に到着した時には 時計は午後3時20分を指していた。

海口市は海南島最大の都市である。丁度5年前にここを訪ずれに時には 椰子の葉の茂る招待所で昼食をとらせてもらったが 今日はどこに泊めてもらうのか少々興味があった。海口市内に入っても記憶に残っているものは見当たらない。自動車は 間もなく広い道路からやや狭い道路へ直角に曲った。その瞬間 この道路が

5年前に立寄った招待所へ行く道路であることを思い出した。そして 間もなく自動車は 高い塀に囲まれた招待所のある敷地へ入っていった。前に訪ずれた時に休息させてもらった建物はそのまま残っていた。5年という歳月ではそれほど変るはずもないだろうと思いつながら敷地内を走っているうちに 前回訪ずれた時よりは敷地が狭くなっているように思えてきた。そして 「到着しましたよ」の声がうながされて外へ出たとたんに 一瞬息をのんだ。前回休息した建物と同じような建物に泊るとばかり思っていた自分の目の前に いかにも南国風の 白壁にオレンジ色の瓦の素晴らしい建物がある。「ここに泊っていただきます」と言われて少々困った。泥だらけの作業靴でその建物に入るのは余りにも申し訳ないといって代りの靴を荷物の中から取出すには少々時間がかかる。「そのままどうぞ入って下さい」「靴をはき代えますから」「かまいません そのままどうぞ」何度かやりとりしながらも救われた気持ちでドアをあけた。この建物は昼食を食べた温泉場にあった建物と同じように ある国の偉い人がここを訪ずれるということで建てられたものらしいが ドアをあけてみて またまた たじろいだ。

あてがわれた部屋はこの建物では最高の部屋だということだが この国にもこのような立派な宿泊所があるのかと思うほど至れり尽せりといった部屋である。何10畳あるか分らない広々とした部屋には 足がめり込みそうにふかふかしたジュータンが敷きつめられ 落ち着いた色のツインベッド 枕元の目覚まし時計とラジオ 大きな机 テレビ 冷蔵庫 ジュータンと全く同じ素材で縁どりした大きな洋服箆箱 ゆったりとした多くのソファ 広々としたバスルームや快適なエアコンデショニングなど これまでにもいろんな国でかなり上等の良い部屋に泊ったことがあるが これほどの部屋に泊った記



海口市にある新しい招待所。色といい形といい南国風の素晴らしい宿舎である。

憶はない。どっかりとソファに腰をおろして足元を見た瞬間 泥靴でジュータンが汚れたのではなかろうかと気になった。だが入口からソファまでの間のジュータンは全く汚れていなかった。毛織りのジュータンは汚れないしみがつかないということはよく知っていたもののやはり人間は一筆者だけかもしれないが一突嗟の時には冷静させ失なうものらしい。

ゆっくりとフロと入り 一休みした午後6時 夕食の音がかった。前回昼食をとった食堂とは全く違って 案内された食堂は 一流レストラン顔負けといった素晴らしい食堂であった。建物の位置から想像すると 素晴らしい部屋のある建物は更地に建てられ この食堂は以前にあった食堂の場所に建てられたものらしい。

次々に出される料理はどれも美味しい。この夕食に招待してくれた人は 海南島でも指折りの実力者ということだが まだ40歳台半ばの人らしい。体格もよし口も達者 こういう人を口八丁手八丁というのかもしれない。2時間ばかりの招宴の終り近く 型通り「御主人様の盃をお借りしまして……」とお礼を述べた。雨に見舞われた潮州最後の夜の招宴で 「今朝から降り続いている雨は 折角親しくなれた私達との別れを惜しむ皆さんの涙ではないでしょうか。こういう雨を日本では ヤラズの雨とか涙雨といいます……。私たちの心情も同じです……」と挨拶したが 海南島最後の夜のこの招宴では 「5年ぶりに訪ずれた石碌鉱山も海口も一段と活気づいていることに驚き そして嬉しく思います。日本では二度あることは三度あるという諺がありますから 少なくとも もう一度は石碌鉱山を訪ずれる機会があるかもしれませんし 最非そうありたいと思います。5年ぶりに逢った林さんは一段と美しくなっておられました。今日は いつものズボン姿ではなく 短かめのスカート姿で一段とあでやかなので 目がくらみそうです……」といった挨拶をした。どちらも大拍手で大いにうけたが 色白の林さんの頬は桜色に染まり 盛大な招宴の終りに花を添えた。

招宴は終わった。すっかり止んだと思っていた雨がまた しとしとと降っていた。これもヤラズの雨かなと思ひながら部屋に戻った。一日の区切りのメモを整理しはじめて1時間ばかり過ぎた頃 ドアをノックする人がいる。どうせ仲間の誰かだろうと思って「どうぞ」と云うと どうしたとか 聞さんと林さんと広州から同行している女性地質家の羅さんが立っていた。3人共 白いブラウスにスカート姿である。特に用事があって来たわけではなく 明日は海南島とお別れということで 林さんを主役にして来てくれたらしい。

1986年3月号

「美しい人が3人も来てくれたのでは私は卒倒するよ」の一声で 少々緊張ぎみだった3人の気持はすっかりほぐれたらしい。それから10時すぎまで楽しい語らいが続いた。3人の女性とはじめて雑談をし しばしば笑いこけたせいか 3人が帰った後は 部屋がやけた広いだけに 妙に空しくなった。窓を開けてみると 雨は音もなく降りつづいていた。午前1時 もう起きている人はいないだろう。

午前6時に起き シャワーを浴びて 7時半には朝食を終えた。いよいよ海南島に別れる日だが どうしたことか飛行機の出発時刻がはつきりしないらしい。飛行機待ちの客が多勢いるとは既に聞いていたが もし予定通りに乗れないと これから先の日程は大幅に狂ってしまう。しかし そうした懸念も間もなく消えてしまった。出発時刻はまだはつきりしないが 今日中に広州へ帰れることは確からしい。

9時半に宿舎を出て およそ10分後に石碌鉱山の海口事務所に到着した。事務所というには余りにも大きく 大会社の社屋という感じである。朝食を終えてまだ2時間ばかりしかたっていないのに3階の食堂で食事をすることになった。大皿に盛られた数々の料理はどれも美味しいのだが 食欲をそそるには時間が早すぎる。昨日のうちにこの食事のことを知っていれば朝食をかげんしたものを 今はもうどうしようもない。だが 山盛りのギョウザをはじめ 大きなテーブルに隙間がないほど並んでいる全部の料理が 昨夜夕食に招待してくれた人の奥さんの手料理で 朝5時前に起きて料理されたものだ聞いて精一杯食べることにした。心のこもった料理というものは 胃袋のささやかな隙間に少しづつ次から次に入っていくものらしい。

飛行機の出発時刻が3時頃だということで 11時過ぎに事務所を出発することになった。道路には所々に水溜りはあるが快晴である。どこまでも真っ平な地形 椰子の並木 いかにも海南島東部らしい風景に目をこらしているうちに ぽつりぽつりと大粒の雨が落ちてきた。そして間もなくスコールがやってきた。昨夜はしくしくと泣いていたのに 別れのこの朝を迎えて 天もついた涙をこらえきれなくなったのか 路面を叩く雨は次第に激しくなっていた。

出発してから約102km 空港待合室には5~6名の先客がいた。若い女性の検査官は 鞆の中を単念に検査し終って「有難う 敵意はありません」と言いながら微笑んだ。冷たくもないジュースを飲み 雑談しているうちに出発の時刻が迫った。数日間の滞在ではあったが 言葉が全く通じなくても人の心は通うものらしい。石碌鉱山出発以来一緒に旅行した人達と別れるのはやは

り淋しい。「手紙を書きます」と 精一杯のゼスチャーをした林さんと握手するのもこれが最後だろう。せきたてられるようにバスに乗る直前 林さんの目はうるんでいるように見えた。

満席の飛行機は 瓊州海峡を越えて 広州へ向う。華僑らしい若いカップルが 後ろの席でしきりにカメラのシャッターを押している。わずかな雲の切れめをねらって撮影しているだけに良い写真は撮れないだろうが 2人にとっては良い記念写真になるだろう。珠江の流れ 数多くの舟が見えはするが 暗くて写真に撮れそうにない。出発してから1時間20分 平穩無事に雨の広州空港に到着した。

東方賓館のフロントは相変わらず混んでいた。このホテルに泊るのはこれで4回目だが 一度も広州市内をじっくりと見物したことはない。7時から9時まで このホテルの4階にあるレストランで 有色金属工業総公司広州分公司副所長の祁振荃氏他と夕食をとった後 K氏と2人で ホテルの売店のすぐ近くにある友誼商店へ行ってみた。そして日本製の電気炊飯器を買った。これから先まだ旅を続けるというのに酔興なことだが これから訪ずれる雲南省では手に入らないかもしれない。K氏と折半して買ったその炊飯器は 通訳として同行してくれている閻さんが近いうちに結婚するという話を聞いてのささやかなお祝である。値段は95元 一般の人のサラリーの1ヵ月半分ぐらに当るのだらう。和やかに あたたかいご飯を食べる2人の姿を想ううち 広州の夜は更けていった。

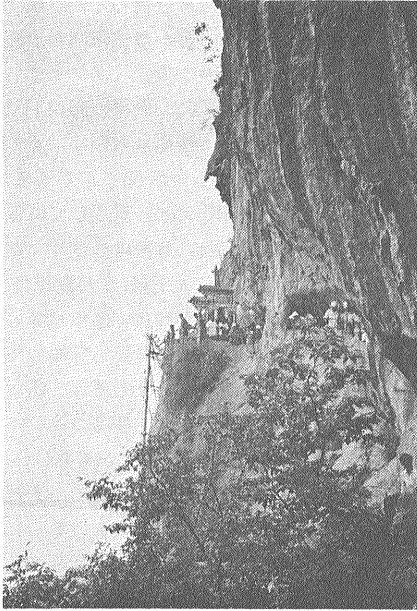
### 昆明の寺

昆明へ出発する日の朝 6時に集合することになっていた。5時半に起き 6時にエレベーターの前へ行くと 中国側の人達は全員揃っていた。早朝の飛行機に乗る人が多いのか フロントは結構混んでいる。6時半に出発し 7時に搭乗手続を済ませた。荷物検査は厳重に行われてはいるが嫌みがなく 終ると 若い検査官が日本語で「ありがとう お気をつけて」と 声をかけてくれた。朝食の代りに待合室の売店で買ったジュース 菓子パン パナナを食べ終えて間もなく 出発のアナウンスがあった。

前回の訪中の折には 今日とは逆に 昆明から南寧を経由して広州へ来たが 今日とは広州から昆明まで直行する便である。昆明までは2時間ぐらいはかかるだろうと予想していたが 実際には7時45分に出発して約1時間半後の9時15分に到着した。昆明空港の気温は19°Cであった。高原の都市昆明は 一年中花が咲き乱れ

るほど気候がよいことから 春城という別名をもっている。空港から市街地へ向う途中の風景は以前とあまり変わっていないが 市街地へ向うにつれて自動車が多くなっていることにまず気がついた。20分ばかり走って市街へ入ると 砂埃とすごい音をたてて道路工事が行われている現場がみえた。どうやら道路の拡幅工事とロータリーを造っているらしい。以前来た時には自動車もそれほど多くはなく 美しい並木の続く静かな町を馬車がゆく牧歌的なたたずまいの都市と思ったが 5年という歳月は あらゆる面で近代化を目ざすこの国にとっては 予想以上の変貌をもたらすのであろう。間もなく宿舎に到着した。前回訪ずれた折に泊った国際旅行社の宿舎の窓際には 色とりどりの洗濯物らしい物が吊してある。どうも以前とは様子が違う。この宿舎の横に入った車は 昆明飯店と大書された高層ホテルの前に停った。このホテルも新しく建てられたもので 前回泊った宿舎はこの国の人の専用宿舎になったらしい。フロントは大して混んではないが 昆明の解放直後に訪ずれた前回とくらべると 外国人観光客が著るしく増えている。案内された11階の部屋からの眺めは中々よい。

昆明市の近郊の西山には古いお寺がある。前回ここを訪ずれるに当って その寺を訪ずれたいとひそかに願っていたが実現しなかった。ホテルの食堂でささやかな昼食を終えた後 「午後は特に用事もないので 西山へ行きましょう」と誘われた時には 全く思いがけなかっただけに内心大いに喜こんだ。ホテルから西山までは自動車で40分ぐらいの距離である。北京郊外の頤和園にある昆明湖は昆明のすぐ近くにある滇池を真似た人工湖ということだが 両者共に巨大な湖だけに そっくりな形をしているかどうかは判らない。西山はこの滇池の西側にそそりたっていた。昆明付近では石林と並ぶ観光地なのだろう 道路の片側には土産品店が並んでいる。そうした店の中に煎った空豆を売っている店があった。店というにはほど遠い屋台みたいなものだし 商っているのは老婆である。余り売れゆきのよくなさそうなその店を見ているうちに 少々買おうと思ったが 「堅くて食べきれないかもしれませんよ」という声で 思いとどまった。特に煎り豆を食べたいと思ったわけではないのだが もしかすると その老婆の姿に今は亡き人の姿を求めているのかもしれない。日本円で約6円の入園料を払って 竜門をくぐり 石段を登りはじめた。森林公園になっているこの付近一帯には海拔2500m前後の峯が連なっている。昆明市街からおおよそ28km 比高にして500m 程度高いだけだが やはり空気は冷たく感じられる。面積およそ340km<sup>2</sup>の滇池



昆明市の南にある滇池の西岸にある西山。  
このような絶壁をくりぬいて 道路や寺が造られている。左下の滇池には養魚場がある。西山への入場料は約6円。

に面する山腹は絶壁に近い。急な石段を登って平らな所に出ると 幅2m足らずの山道はその断崖にうがたれて足元には滇池が迫り ガードレール代りの切り残しの石の柱は今にも倒れそうで 涼味満点である。恐らく高所恐怖症の人は 足がすくんで この山道を歩くことはできないかもしれない。登れども登れども石段は尽きそうにない。一行の中にバテ気味の人がいるのを見て 下山することにした。人がすれ違えないほど狭い道では 手摺りになっている自然石の柱が崩れ落ちそうで 慎重な足どりで下りてゆく人が多いようだが こうした所でも押し合いへし合いするのを面白がる連中がいるらしい。そうした連中の中には 文字通り断崖絶壁をなす狭い岩場の上に立って おどけている者がいる。眼下に光る滇池に見える 黒い点々は 養魚場かもしれない。滇池 その畔りにそそりたつ西山 その崖にうがたれた道路と そり屋根の祠など 将に西山は 絶景である。

竜門を出て少しばかり北方へ行った所に 大華寺と華亭寺がある。大華寺は元の14世の頃に創建され1688年に拡張されたらしいが 老朽化したため 解放後に修復されたらしい。華亭寺も大華寺とほぼ同じ頃に建設されたもので五百羅漢で有名である。この二つの寺は決1986年3月号

して壮大というわけではないが うつそうと茂る深い緑を背にし 滇池をはるかに見下ろす場所に位置するだけに やはり人を魅きつけるたたずまいである。多勢の人がこれらの寺を訪ずれているようだが このような人達が寺を訪ずれる目的は 単に見物だけではないらしい。時折 小さな幟を持った人の後を歩く人達やお揃いの帽子をかぶった人達が目につくが この人達は地方から来た団体旅行の人かもしれない。

大きな仏像や五百羅漢など 美しい彫刻がたくさんあるが いくらそうしたものが好きだといっても じっくりと見る暇はない。もっと見たいと言え 案内してくれている人は心良くてつきあってくれるとは思いますが 数えきれないほどここを訪ずれているにちがいないと思えるだけに 自分の欲望のままに行動する気にはなれない。

息をきらして石段を登り 立派な古寺を見学して 西山をおりにすることになったが 華亭寺の境内の片隅に 一きわ鮮やかに色づいた葉をつけた灌木を見かけた。その瞬間 吉野山に囚んだ詩を想い出した。「古老の松柏天平に映ゆ 山寺春を訪ぬれば春寂寥 眉雪の老僧時に掃くを止め 落花深き所南朝を説く」。だが 今は夏 そして この寺には箒を手にする老僧の姿もない おだやかな滇池の水面がにぶく光る頃 北端部の入江の岸に建つ大観楼に立寄った。これは古くは観音寺と呼ばれ 1692年(康熙29年)に創建されたということだが やはり風雪に耐えきれない部分もあるらしく 所々で修復作業が行われていた。静かな水面 美しい庭 優雅な3層の朱塗りの建物 仲秋の名月には多様な部族の人達が着飾って 湖面に浮べた舟に乗って月を賞でたということだが 叶うことなら一度だけでいいからそういう経験をしたいものである。

午後6時には ホテルの食堂はほぼ満席であった。立派なホテルの食堂なので期待はしていなかったが やはり クオチヤオミエン(雲南省独特の麵)はメニューになかった。同行の人達は雲南省を訪ずれるのははじめてである。折角の夕食だから名物料理を食べた方がよいということで メニューを見ているうちに 汽鍋鶏があるのに気がついた。この料理は鶏肉や野菜などを土鍋に入れ 蒸気でむしたもので 代表的な雲南料理の一つである。だが その味は5年前に東川鉱山の食堂で食べさせてもらったのには及ばなかった。クオチヤオミエンが 懸命に努力する夫への 若い妻の深い愛情が生み出した料理の傑作であることは 以前に 本誌で述べたが 汽鍋鶏の由来を確かめることはできなかった。だが 正統な汽鍋鶏として東川鉱山で御馳走してもらったものには 何種類もの茸や“冬虫夏草”と呼ばれる植



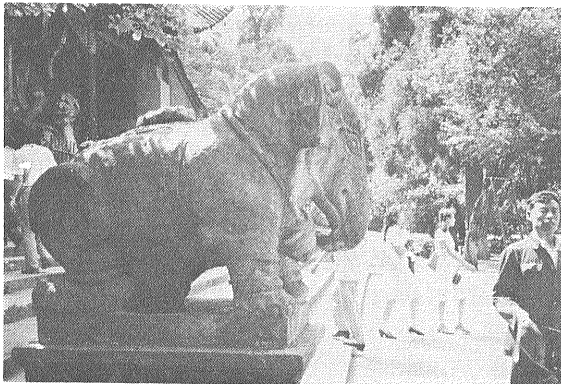
物の根などが入っていたこと 水を全く用いない鍋料理であること 山岳地形で特徴づけられる雲南省の料理であることなどから推察すると 山岳地帯を生活の場としてきた部族の一般的な料理のように思える。東川鉱山とホテルの食堂のこの鍋料理の味の違いは 多分 茸や野菜を豊富に入れて全く水を使わずにじっくりと料理したものと 多勢の客の要望にできるだけ早く応えなければならぬため 短時間で料理したものと の違いであろう。

夕食を終えて1人で散歩に出てみた。ホテル前の大通り東風東路を西へ向ってしばらく行くと 南北方向に走る北京路との交叉点の西南側に大きな広場がある。前回の旅行の折にこの付近を通った時には ただの広場という感じだったが そこには無数の小さな店が軒を連らね 歩くこともままにならないほどの人の波がうねっていた。駄菓子屋 焼鳥屋 八百屋 葉草屋 オモチヤ屋 衣服屋などなど 一体 この広場には何軒の店があるのだろうか。焼鳥の美味そうな香りとは違った香ばしい香りが漂ってきた。その香りにつられて迎って行くと 七輪らしいものの上にせた金網で 餅らしいものを焼いている店があった。いかにも美味そうな焼鳥や餅らしい物に食指が動きそうになるが 如何せんここへ来る直前にホテルの食堂で食べた料理で 胃袋の中にはほとんど隙間がない。このような店があることを知っていたら 間違いなくホテルでの食事には目もくれれば この広場でいろんな物を胃袋に納めたことだろう。高原の都会昏明は すっばりと闇に包まれ 気温も幾分下ってきたらしい。昔なつかしいカーバイト・ランプの青白い光と臭いとシューツというかすかな音が 郷愁をかきたて 遠い昔を想い出させる。

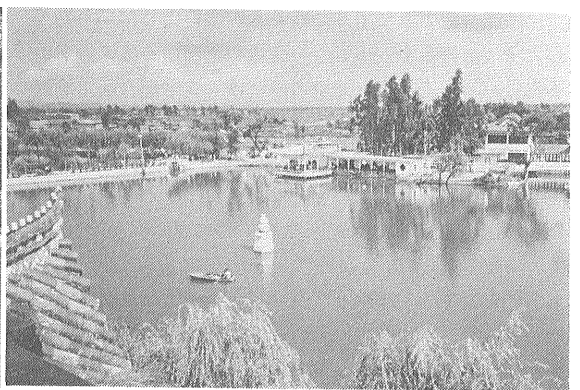
東風東路に戻って南大橋を渡り 南に曲って滇池に注ぐ盤竜江沿いの小路を歩いてみた。昆明市街のほぼ中

心を流れるこの川の岸边には かなり古びた家が隙間なく建っている。白壁が所々はげ落ちていた家 流れているとはとても思えないほど静かな盤竜江の水面 その水面に映る光が織りなす様々な模様 スケッチブックを持っていれば 全く躊躇せずに か細い光の下で鉛筆を走らせていたことだろう。路地に人影はなく 時折どこからともなく 高笑いの声が聞こえてくる。多分 夕食を終えて一家団樂の時を 過ごしているのだろう。声が洩れていると思われる家は小さく 壁の塗料は大部分が はげ落ちていた。恐らく自動車はもちろん 電気器具や立派な流しなどはないだろうが 一家全員が集って笑顔で語っている人達の姿を想像しているうちに いつのまにか家庭のぬくもりを感じていた。ホテルのロビーにも土産物売場にも 多勢の人がいた。団体客の中には 妙に偉張りちらしているらしい人がいる。声高に売店の従業員に苦情を云っている御婦人も居れば せかせかと動き回っている人もいる。春城という別名をもつ昆明のたたずまいにはどうみても このような人達は似つかわしくない。

東風東路から少し入った所にある昆明飯店の11階の部屋は 時折自動車の警笛が聞こえてくるだけで静かである。特にしなければならぬこともなく 一日を振返ってメモを綴っているうちに 夕暮に見た広場の店のことを想い出していた。前回には全くなかった無数の店が 今何故この広場に集っているのだろうか。国内で生産されたものだけではなく いろんな国からの輸入品も売られていたようだが もしかすると いわゆる自由市場として この広場が利用されるようになったのかもしれない。5年という歳月は長いようで短い。およそ5年前には外国人に門扉を閉ざしていたこの都に 今は各国からの訪門客が絶えず また様々な外国製品が店に並んでいる。だが どの外国製品を見ても 雲南



五百羅漢で有名な華亭寺の入口にある石像。この寺も西山にある。



滇池の北端部にある曹時代の大観楼（左下の屋根）付近の公園。

省特産の斑銅細工に勝るものは見出されなかった。よくよく調べてみれば 民芸品の中にはこれに勝る外国製品もあるのだろうが 長い伝統に培われてきた芸術や美術は やはり独特の品格と美しさを備えているように思える。

### 箇旧の錫鉱山

午前7時前にはホテルの食堂はほぼ満席であった。客はほとんど観光客らしい。遊びの旅ならばもっとゆっくりと寝ていればよさそうなものだが 昆明を訪れる客のお目当ては石林だろうから そうそう朝寝坊もできないだろう。粥を主にした朝食を早々に済ませ荷物の大部分をホテルに預けて 8時に最終目的地の箇旧へ向って出発した。昆明を出発してから帰って来るまでは 写真撮影をしないようにとの注意があった。箇旧はベトナムとの国境に近い雲南省南端の重要都市であり 国境付近の状況からみれば 写真撮影が好ましくないことはよく分る。時間が許すならば昆明から箇旧まで汽車で行きたいと願っていたが その秘かな願いは 昆明発午前6時15分の1便だけでしかも14時間以上もかかると判って もろくも消え去った。

昆明を出発してからの街道沿いの様相は 5年前に訪ずれた時と殆んど変っていないように思えたが やはり5年という歳月は この国の辺境にも或程度の変革を与えたい。以前は 昆明からのこの道路傍に新鮮な野菜などを商う農夫の姿がみられたが 自由市場の出現でそうした人達の姿が少なくなった半面 所々に設けられた自由市場には人が溢れている。昆明の広場に隙間もないくらいに立並んでいた屋台といいこの市場といい国の 経済政策がこの広大な 国土の隅々まで短期間のうちに浸透したことを示しているように思える。自由市場が主として個人の生産物の販売から成り立っているとしたら いわゆる人民公社による生産と収益のあり方は著るしく異って 個人の土地の広さや土質や気候やこれらに最も適する作物の栽培のあり方などによって 個人の収益にはかなりの差が生ずることだろう。それぞれの土地の性質や気候などに適した作物の品質の選択や生産性の向上という面からみれば 自由市場の存在はより良い作物を収穫するための研究に個人が努力する場を与えるように思える。

雲南省の名勝の一つ石林は 相変わらず 見物客で賑わっていた。こうした観光地も やはり時の流れのままに少しづつ姿を変えてゆくのだろう。前回訪ずれた時にはなかった貸衣装屋では 高地民族特有の衣装を借りて写真に納っている人が多勢居たが 望峰亭近くの岩場

で見物客の交通整理をしていた可愛いお嬢さんの姿はなかった。

2時間ばかりの間に昼食と一部の見学をして 午後2時に石林を出発した。大きく曲りくねる坂を南へ向って登って行く途中には 石林でみられると同様の石灰岩の柱が一かたまりづつ林立している。坂を登って行くにつれて その柱は少しづつ短くなってゆく。こうした短かな柱も 地表の浸食が更に進んでゆけば 石林でみられると同様の 巨大な石の林としての姿を見せることになるだろう。自動車でも1時間ばかり走っても尽きないこのような石の林が 遠い将来完全に姿を現わした時のことを想像すると この時点での石林は気が遠くなるほどの規模になるだろうし そして それまでには立派なホテルが多数建設されるかもしれない。この雄大な石林を三度訪ずれることはないと思うが できることなら この付近に宿泊設備を建設する時には是非木造か石造りにして欲しいものだ。

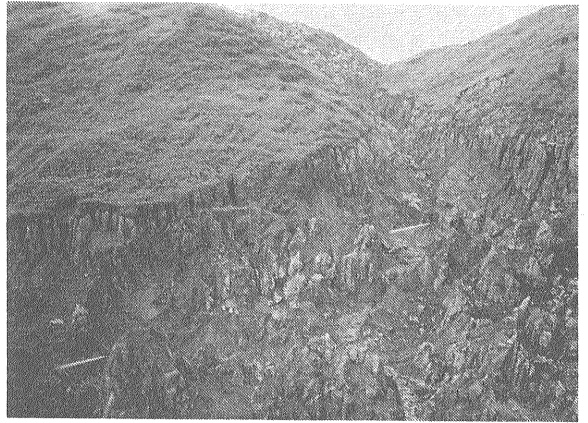
坂を下りきった所には広大な田園があった。真っ平な文字通りの平野は 水平線の果まで続いている。山らしい山も見当たらないが やはり盆地のせいかな昆明からこの平野に来るまでの間よりは むし暑く感じられる。のどかな農村風景は美しい。高い並木の道を野菜を積んだ馬車が行き交い 一輪車を巧みに押して老農夫が行く。一かたまりの集落の入口に 白地に黒く弥勒と書かれた看板が立っている。釈迦の説法を受けなかったすべての人を救うため 釈迦の没後56億7000万年後にこの世に姿を現わすといわれる菩薩は弥勒菩薩として仏教徒に広く知られているが この村の名前とこの菩薩の名前との間には何か深い関係があるのだろうか。この村の近くに芭蕉という名の部落や竹園という名の村があるが どの名もいわくありげである。

竹園で5分間ばかり休んで 一気に箇旧まで走る事になった。舗装道路は有難いが 大平野の中を突走るのは 風景に変化が余りないだけに退屈にも思われる。出発後3時間で発電所や化学工場などがある開遠を過ぎ それから1時間10分後に目的地の箇旧に無事到着した。開遠を過ぎてから山間部を通る折にも幾分涼しさを感じてはいたが 箇旧は標高1720m 半袖シャツでは少々涼しすぎるほどである。昆明を出発して10時間石林での昼食時間などを除いて 8時間の自動車の旅は終わった。

案内された鉱山の招待所は立派であった。木造2階建が3棟建っている。一番奥まった建物の2階に案内され 部屋に入ったとたんに さすがに中国第一の非鉄金属鉱山 そして世界に名だたるはず鉱山だけのことはあると思った。広々とした応接間とその奥にあるベッ

ドルーム 大きなバスタブの横の棚には 世界的に有名なメーカーのカミソリが置いてあった。新しい建物ではないが 清潔な室内には疲れた身を慰やす何かがある。10個余りの大きな湯呑 熱い湯の入った大きなポットにお茶 そして湯ざましの 冷たい水の入ったポット 大きな机の上には今はなつかしくさえ思えるインクとペンとメモ用紙が置いてある。夕食後の散歩から帰って机に向かい 久しぶりにインクをつけたペンで一日のメモを書きはじめて間もない10時過ぎに 閻さんがドアをノックして入って来た。もう何度か経験した日本語の学習である。文科系出身の彼女には地質の用語を理解するのは容易ではない。簡旧鉱山の地質鉱床の概要が中国語で書かれている印刷物の中味を一つ一つ単念に検討しはじめた。それからおよそ2時間 彼女は中味を大体理解したらしく 丁寧に挨拶して部屋へ帰って行った。自動車の音も人の声も全く聞こえない静かな夜である。ベトナムとの国境まで100 km たちまちの簡旧の夜 国境の街とは云えないまでも 何となく緊張感のただよこの街の夜はこのようにいつも静かなのだろうか。

一夜明けて コーヒー 目玉焼 パンの朝食を終え 宿舎の中にある会議室で鉱山の概要 地質鉱床の説明などがはじまった。経理(社長)は出張とのことで 副経理の劉貴堯氏の挨拶と簡旧の概要の説明にはじまった午前中の多様な説明は 若い頃から一度はここを訪ずれてみたいと願っていた身には 一しお感概深いものがあった。およそ400年前に錫の採掘が開始されたこの地は 四季に恵まれ 最高気温 30°C 最低-4°C 年間平均気温 18°C 前後の高原の街である。一般説明のはじめに「来訪を心から歓迎します。昨夜食事を共にしたいと思っていましたが お疲れだと思って遠慮しまし



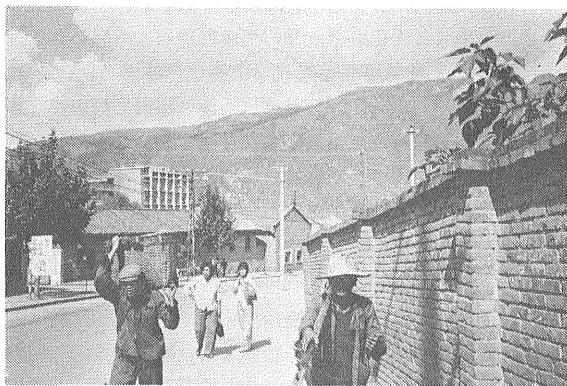
簡旧鉱山の水力採掘現場の一つ。石灰岩の上に堆積した砂錫を水力採掘している。中央や右と左下に白い横線のように見えるのは採掘用の高圧水。

た」という劉氏の挨拶に 温和な人柄と気くばかりが強く感じられて 大鉱山をはじめ訪ずれた緊張が急に和らいだ。簡旧の人口33万5000人 従業員4万人 家族を合せると約10万人がこの鉱山の関係者であるという。

この鉱山の鉱床は三疊紀簡旧層の石灰岩やドロマイト質石灰岩中に貫入した燕山期晩期(64~80百万年前)の黒雲母花崗岩に伴われて形成されたスカルン型鉱床と石灰岩等の層理面や割目に支配された層状及び脈状の鉱床であるが これまでに採掘されてきたのは層状や脈状の鉱床を起源とする砂鉱床である。およそ400年間にわたって砂鉱床が採掘されてきたということは その供給源となった鉱床が その分だけ 削剝されたことを意味するが 一体 鉱床生成当時から現在に至る間に 地表からどのくらいの深度まで浸食されているのだろうか。

1950年から1983年までの34年間に採掘された錫は金属量にして約40万 t 水力採掘されている砂錫の平均錫品位は0.1%であるという説明がなされた。この生産量と品位から単純に計算すると 採掘された砂錫の量は4億 tになる。層状や脈状の鉱床の錫品位は ボーリングコアについては0.24%から0.56%の分析値が得られており 平均錫品位を仮りに0.4%とすると40万tの砂錫の供給源となった鉱床の削剝量は1億 tということになる。このような単純な計算によって得られた鉱量はどの程度 真実に近いか分らないが 400年前から近代中国の建国までの間細々と採掘されてきたにせよ 殆んど未採掘のスカルン型鉱床や層状や脈状の鉱床が潜在している事実を思うと この鉱山の錫をはじめとする金属鉱物資源の潜在量は途方もなく大きいと想定せざるをえない。

簡旧の市街から比高800 m付近の山頂に 砂錫を採掘



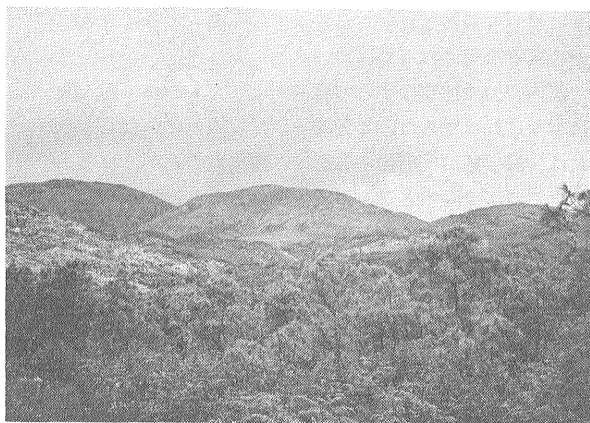
簡旧市の中心からやや離れた付近の風景。後方の山腹に見える地割りの跡のように見える部分は 大断層。この写真は現地の同行者の承認を得て撮影されたものである。

した跡があった。その採掘場の跡には石筍を想わせる石灰岩がむき出しになっていた。そしてその石灰岩のくぼみには砂錫らしいものは全くみられなかった。水力採掘によって洗い出された錫は恐らく一粒も残ってはいないのかもしれない。採掘跡から南に遠く見える高い山の連なりはベトナムとの国境付近かもしれないがそのたたずまいは脳裏に焼きつけるほかに残すすべはない。急に曇り大粒の雨が降ってきたが採掘跡に別れを告げて間もなく雨は止み光が射してきた。水力採掘場では圧力を加えた水がノズルから勢よく吹き出し錫を含む地表付近の堆積物はみるみるうちに崩れ濁流となって落下していく。深い採掘場に流れ落ちたその濁流はポンプで汲み上げられて錫鉱石に姿を変えトラックに積み込まれて選鉱場へ送られてゆく。選鉱場では多数のテーブルが動いていたが浮遊選鉱を併用した方が実収率がよいのではないかと考えたのは選鉱技術にうとい素人考えだろうか。

1950年から1983年までの金属生産量は錫40万t鉛と銅で30万tということだがこれらの他に年間約200tのタングステンが生産されまた亜鉛や微量に含有されているビスマスインジウムなども生産されている。1951年から1983年までに掘進された坑道の総延長は約800kmに及び800~900mの坑道延長当りの獲得量は約1万tということである。訪門当時地質担当の技術者を中心に今後の探鉱開発に関する計画が幾つか検討されていたがこの計画が実行された段階でこの鉱山の生産量はどのように変るのだろうか。現在の生産量の内訳は概略露天掘りと水力採掘で約60%（このうち水力採掘は90%）坑内採掘が40%ということである。

鉱山到着の翌日の夜劉氏の招宴の席上雲南省にはクオチャオミエンという麺料理があるそうですがどういふものかたずねてみた。そしてその翌日の昼食にクオチャオミエンと冷奴が出された。はじめて雲南省を訪れた折クオチャミエンを食べたかったが目的を達しなかったと話したため劉氏が料理長に命じて作らせたらしい。また冷奴は日本人の好物だからということでもわざわざ作ってくれたということである。土地の人にとってみれば大した料理ではないのかもしれないが長い間クオチャオミエンを食する日を待ち望んでいた筆者にとっては劉氏や料理長の心ざしが一しお嬉しく思われた。

また来て下さい。そして何年も居て下さいとの温かい言葉を後に午後8時鉱山に別れを告げた。5時に起き6時頃に散歩に出た折宿舎近くの大きなプールでは多勢の人が水泳を楽しんでいた。多分出勤前の一時に体力の維持向上に努めているのだろうか帰宅  
1986年3月号



水力採掘を完了した塘子凹（タンズワ）地区の採掘跡。写真ではよく分らないが、ここにみる石灰岩は石筍のような形をしており、錫石は1粒も残っていないのではないかと思えるほど完璧に採掘されている。

してからの朝食の温かい粥は一しお美味しいことだろう。

鉱山の食堂の料理人が作ってくれた昼食を石林近くの招待所でとった後一気に昆明へ向って走った。昆明ホテル着午後4時観光客の多くはまだ帰着していないらしくロビーには人が少ない。

夕食後同行の金鍾氏と散歩に出てみた。例の広場で営業している店はもう1軒もないが人通りは多い。市の中心街にある本屋に入ってみた。その本屋の2階にある理工学や自然科学などのコーナーには予想以上にぎっしりと本が並んでいる。その中に高等学校生徒用の参考書が数種類あった。そして最初に手にした参考書に箇旧鉱山の地質鉱床の概略図を見つけた。雲南省最後の夜北京でも見当らなかったその本を買った金氏は留念記念としてプレゼントしてくれた。所



開発準備中の大斗山鉱床。網状に発達した細脈中に、平均0.7%の錫が含有されており、鉱床は深さ200mまで確認されている。

々に水溜りがある東風東路をホテルへ向って歩くうちその本は次第にぬくもっていった。

雲南省での仕事はすべて終わったようなもの 個人的にしなければならないことが一つだけ残っていた。それは 箇旧鉱山へ出発する折に 海南島の人がくれた小物をこのホテルのどこかに置き忘れをことを想い出しその行方を確かめることであった。決して高価なものではないが 人のあたたかな心のこもった物を簡単に諦める気にはなれない。受付では「室内に忘れた物であればその部屋のある階の係員が保管し ロビーや食堂に忘れた物であれば こちらに保管しております」と言われた。そして前に泊った部屋のある階へ直行し 女性の係員に聞いてみると 名前を書いた紙片とともにその物を出してくれた。その物を手にした瞬間 人の厚意を無にしなかったことの安堵感と 物を大切に人達の素晴らしさをつくづく感じた。金氏のプレゼントと半分諦めていた物が手許に戻ってきた喜び この素晴らしい夜を忘れることはなからう。

いつもよりは少し寝坊して 7時に起きた。昆明の上空は雲一つなく晴れわたっている。昆明空港の待合室は まだ出発までかなり時間があるせいか閑散としていた。通訳の閻さんは この旅行で日本語がかなりうまくなったように思えたが 「日本語の難かしさについてゆけそうにありません。これまで頑張ってきましたが諦めようと思います」と 力なく語った。「閻さん人間は自分の前に立ちはだかる壁や悩みが大きければ大きいほど それを乗り越えることによって よりたくましく真実の道を歩くことができるのではないかな。諦めることは簡単だけれども 若い時に点した希望の火を自分で消してしまうと もう一度火を点すことは難かしいよ。自分の過去を人に話すのは好きじゃないけれども 悩んでいる閻さんの心の支えになるかもしれないから聞いてもえるかな」。話しはじめて 5分ばかりたった頃 閻さんの目には涙が溢れてきた。

快晴の空の旅と思っただのも束の間 長江の上流に当る金沙江上空を過ぎたとたんに 眼下は厚い雲におおわれてしまった。四川省の省都である成都経由の北京行と聞いていたので 地質的にも著名な四川盆地の状景を見ることができると楽しみにしていただけに 全く残念である。昆明から成都までは 730 km およそ 1時間 15分の飛行である。成都の気温は 29°C だが 盆地の中にあるせいか かなりむし暑い。わずか20分の休憩時間も 熱いお茶を一杯飲んだだけで呆気なく過ぎてしまった。

四川盆地上空を過ぎたとたんに 空は快晴に変わった。

左に遠く見える泰嶺山脈の連山のなだらかな姿態は 自然のきびしさに耐えてきたにしては余りにもやさしく見える。成都を出発してから 2時間 ささやかな機内食に満足して 北京空港に帰り着いた。気温 25°C の北京は 昆明のすがすがしさに及ばないものの 成都や広州のむし暑さにくらべれば快適である。

一夜明けて北京の空は快晴であった。午前6時 ホテル前の大通りにもすぐ横の銀座通り王府井にも 職場へ急ぐ多勢の人がいる。日傘をさしたスーツにハイヒールのお嬢さん カラーシャツにジーパンの若者 どの国でもふつうに見かける服装ではあるが この若者達は 厳寒の真冬には一体どのような衣服で王府井を闊歩するのだろうか。

夕食を終えた午後8時 北京の空には無数の星が輝き 昨日とは違って冷やかな風が吹きわたっていた。北京は立秋を迎えたとたん秋色が深まってゆくと聞いていたが これほど明瞭に夏と秋の境があるとは想像もしなかった。これからはかけ足で秋が訪ずれ 緑濃い並木の葉が鮮やかな色をつけ そして枯れ果ててゆくのだろう。その状景を想うと寂しさを感じないわけにはいかないが 秋色に染った北京の風景が美しいことは確かであろう。北京秋天と題する名画を一目見たいと思っているせいか 深まってゆく秋の北京の表情にふれたい欲望が いつの間にか頭をもたげてる。

午前0時を過ぎても ホテル前のタクシー乗場では 順番待ちの客が長い列を作っている。夜更けまで自由な時を最高級のホテルで過ごすことが 以前にもこの国の人達にあったのだろうか。広々として天井の高い室内は快適に冷房されている。最後の夜 旅行中のメモをまとめ。閻さんへのお礼と激励の手紙を書き終えた時には午前2時をとくに過ぎていた。

5年ぶりに訪ずれた北京でも 田舎でも 時の流れにつれて変わりつつある多くの姿を見たが これから5年後には一体どのように変わっているのだろうか。

雲一つない空の下に息づく北京の息吹きとも思える暑さの中を空港へ向った。短かい間ではあったが 旅行を共にした人達と別れるのは寂しいものである。

帰国後間もなく 閻さんからの手紙が届いた。その手紙には「これからも日本語を続けます。快晴の北京空港で見送りましたが 先生が出発されて間もなく 北京は大雨に見舞われました。あの雨は涙雨だったのでしょうか。お父さんと旅行しているような楽しかった日々を思い出しています」としたためられていた。